

WEEKLY

ツーリズムビジネス専門誌
週刊トラベルジャーナル

2015年1月5日発行(毎週月曜日発行)
第52巻第1号通巻2933号
1964年9月17日第三種郵便物認可



TRAVEL JOURNAL

Japan's No.1 Travel & Tourism Business Magazine
観光立国を支えるすべての人々に向けて

2015
1/5・12

合併号

観光産業の
関わり

インバウンドは
敵なのか

高齢者大国の 前線から

vol.
022



文・篠塚恭一 (SPIあ・える倶楽部代表取締役)

何が人を 幸せにするか

いい商品といえども売れる商品とは限らない。言い古されたことだが、介護福祉の世界にも以前から「これはいい」と評価されながら、利用が広がらない製品がある。全自動排泄処理機もそのひとつだ。寝たきりになった人は、自身でトイレに行くことができないから、紙おむつを使用せざるを得ない。介護をする人は、日に10回ほどおむつ交換にあたることになる。公的保険サービスを受ける人なら、時間ごとにヘルパーが来て交換作業してくれるが、自宅で介護を受ける人のなかには、家族がそれを行う家庭も少なくない。最近は介護をする側も高齢化が進み、高齢者が要介護高齢者を世話する老々介護もめずらしくはない。自身の力が入らなくなった大人の重量は相当なもので、おむつ交換も重労働となる。夜間となればなおさらで、2時間毎に褥瘡(床ずれ)防止のために体位を変えながらの交換は眠れぬ苦労も大きい。

そこで考えられたのが自動排泄処理ロボットだった。元をたどれば、宇宙飛行士の排泄処理技術で、それを自動車メーカーが買い取り、高齢化の進む日本の福祉機器として役立てようとした。これさえできれば24時間、カバー内部に仕込まれたセンサーが排泄を感知すると自動的に洗浄を始め、数分でドライヤー乾燥までして仕上げてくれる画期的なものだ。そもそも、おむつを使用する人は、新しいものに交換されると気持ちよくなり、すぐ排泄してしまうというデータがある。つまり、おむつ使用者の

多くは汚れた下着をずっと着けているようなもので衛生面に問題があった。この商品は家族の負担を減らし本人の衛生も守られる。しかも使い捨てられる紙おむつは値段が高く、原材料が木材だから、森林伐採が地球環境に負荷をかけると国際的批判もあった。だから人に優しく、エコでローコストな全自動排泄処理機が市場に出せれば、社会問題が一挙に解決されると絶賛されていた。

ところが、販売は10年たっても苦戦が続き、権利を有する会社も転々とした。認定機器となって補助を受けられるようになり、リース制度で費用負担も小さくなったが普及に至らないままである。

人は時として合理的と思えない行動をとり、道を選ぶ。福岡を走る路線バスは、15分で行ける距離を客の要望でわざわざ遠回りさせ、30分かかるルートに変更した。そうしないとクレームがあり、売り上げが減るといふ。聞けば路線を利用する多くが高齢者で、週に数回バスで市中に買い物へ出かけていた。だったら早く行けたらいいと思うが、バスの楽しみは乗り合う人と交わす道中のおしゃべりで、それが15分では収まらないというのだ。

高齢化が進む中山間地では、荒れた森の間伐や休耕地をおこして農家を手伝う若者が増えた。自腹を切ってまでこんな重労働をしにくる人などいないと地元の見方は冷やかだだったが、行く人は休みに農村で誰かの役に立ち、町中ではできない里山遊びで自然とふれあうことを楽しみながら働いている。経済優先でバブルが弾けた後を失われた20年という人もいるが、この時期に生まれ育った若者の中には、自身が置かれた社会を受け入れ、素直に生きることを望み、それは身勝手なわがままではなく、誰かの役に立ちたいという精神が養われている。そして、それを知った地元の年寄りの中でも何かが変わり始めているのを感じる。

人を幸せにするのが福祉なら、機器もまた何が人を幸せにするのかを問い直さなければいけないと若者に教えられている。



しのづか・きょういち ●91年にSPIを設立し、現職就任。95年トラベルヘルパー(外出支援専門員)の養成開始、介護旅行事業に取り組み。06年NPO法人日本トラベルヘルパー協会を設立し理事長に就く。